

# 2006年度 早稲田大学 商学部

## 日本史 解答

### ① 古代の政治史 <標準>

問A 3 問B 5 問C 6 問D 2 問E 5

問F 4 問G 6 問H 1 問I 2 問J 4

「適当なものが無ければ6をマークせよ」という消去法の効かない問題形式のせいで、難度が高くなっている。一般的な受験生向けの模試では、あまり出題されない形式なので、過去問などでこのタイプの問題になじんでいないと辛いだろう。問Iは消去法が使えず難しいが、他の問題が正解できると、ここでさらに6という答えはあり得ないだろうと思えてくる。

### ② 永仁の徳政令・中世の経済 <やや易>

問A 4 問B 2 問C 3 問D 1 問E 5

問F 3 問G 2 問H 5 問I 1 問J 4

問Jがやや難しい。史料Iは大変有名な史料だが、こうした一部分の抜粋に備えてあったかどうか。ワンフレーズで史料判別ができるようにしておく必要があった。

### ③ 近世初期の外交 <やや易>

問A 2・4 問B 3 問C 4 問D 2・5 問E 3

問F 3 問G 4 問H 1 問I 5 問J 1・5

早稲田ではあまりに定番なテーマからの出題。定番なのだから、もう少し難しく出題してほしいとすら思ってしまうほどである。問Eは1(奉書船)でも正解ではないかという意見もあるが、作問者の考えは明らかに3(朱印船)である。その根拠は「出題者が著書でそう書いているから」だけに留めさせてください。

**4** 近代の外交 <標準>

問A 1・4 問B 3・5 問C 2・3 問D 2・4 問E 1・5

問F 3・5 問G 2・3 問H 2・5 問I 1・4 問J 1・5

商学部によく見られる「2つマークせよ」というタイプの問題で、当然2つ正解して初めて得点があたえられる。問D・Gがやや難しく、問Hが難問。

**5** 55年体制・産業革命 <やや難>

問A 2・5 問B 2・3 問C 2・5 問D 2・4 問E 1・4

問F 銀本位制の確立で物価が安定し、銀行から調達する資金の利子率が低下した。  
(35字)

問G 重工業資材などの輸入増加で貿易収支が大幅に赤字なうえに、巨額の外債の利払いがかさんだから。(45字)

問A・Dがやや難しい。論述問題は問Fがやや難しいが、文字数が少ないのと用語指定がついているため、推測で自分で論を構築することができた人がいるだろう。近現代の経済のしくみを理解することの重要性がよくわかる出題であった。

**6** 江戸時代後期の外交・大衆文化と大正時代の社会運動 <易>

問A オランダ風説書 問B 大黒屋光太夫(大黒屋幸太夫でも正解)

問C 桂川甫周 問D 咸臨丸 問E 勝海舟(勝義邦、勝安房、勝安芳でも正解)

問F 職業婦人 問G 円本 問H 文化住宅 問I 友愛会 問J 日本農民組合

近代の文化まで学習が間に合っていなかった人にはきつかったかもしれないが、易しい用語しか問われていない。

**講評**

模試の成績を云々する生徒がいるが、一般の大学入試を意識したオーソドックスな問題がいくらできても、早稲田の問題が解けるわけではない。出題される用語の水準や設問の形式など、早稲田向けの対策があつて初めて高得点が得られるのである。正誤問題にしても、それぞれの作問者が作る誤文のタイプを考える訓練をしておかないと、大問**1**のように消去法が使えない問題は解けないのである。